# 〈新　刊　紹　介〉

（価格は税込定価）

**見坊行徳・三省堂編修所編著『三省堂国語辞典から消えたことば辞典』**

本年は『明解国語辞典』初版が出版されてから 80 周年にあたる。『明解国語辞典』と歴代の『三省堂国語辞典』第 7 版までの間に削除された語の中から，時代性の認められる語，語釈の興味深い語など 1,000 項目を選び出して辞書形式に集めたのが本書である。「掲載版ゲージ」と称されるマークが鼇頭に示され，その項目がどの版に掲載されていたか，すなわち掲載時期や掲載期間がひと目で確認できるようになっていたり，項目の脚注に，廃項となった版と刊行年や補足情報が記されていたりするなど，随所に辞書とことばの変遷を知るための工夫が凝らされている。また本文の項目は，それぞれ掲載された当時の紙面を用いているため，掲載版ごとの異なる書体を楽しむこともできる。巻末には「版数別削除項目（抄）」が付され，本書掲載の 1,000 語を含む計 2,000 語の削除項目を版ごとに一覧できる。（遠藤佳那子）

（2023 年 4 月 15 日発行　三省堂刊　四六判縦組み　256 頁　定価 2,090 円　ISBN 978-4-385-36624-1）

**郭南燕編著『宣教師の日本語文学――研究と目録――』**

題名にもなっている「宣教師の日本語文学」とは，本書では「キリスト教の宣教師が非母語の日本語を用いて，聖書物語の伝達と解釈を中心に，広範な人文学的知識を表現する言語芸術である」と定義する。それに基づき，本書は幅広いジャンルに跨る著述に光を当て，思想的・文化的内容を吟味し，日本文化への寄与を解明しようとする。

「第一部　研究篇」では，明治期に活躍したド・ロ神父から 2022 年に没したリーゼンフーバー神父に至るまで，幅広い対象を取り上げる。構成は以下のとおりである。「序章　外国人宣教師はなぜ、日本語で書いたのか（郭南燕）」「第 1 章　幕末・明治初期の日本語文学―ド・ロ神父を中心に（郭南燕）」「第 2 章　仏人宣教師リギョールの政治論――愛国論を中心に――（将基面貴巳）」「第 3 章　カンドウ神父の著述――戦後日本人の案内者――（郭南燕）」「第 4 章　カンドウ神父の日本語――『思索のよろこび』を中心に――（牧野成一）」「第 5 章　ホイヴェルス神父の日本語文学（谷口幸代）」「第 6 章　キリスト教と禅――エノミヤ＝ラサールのふるさと――（堀まどか）」「第 7 章　クラウス・リーゼンフーバー神父の著述と司牧の日本文化への貢献（釘宮明美）」「第 8 章　遠藤周作と宣教師たちの交友――戦時下弾圧，GHQ 占領期，第二バチカン公会議を背景に――（増田斎）」「第 9 章　「日本語文学」試論（新井菜穂子）」以上 9 章からなる。

「第二部　外国人宣教師日本語著作目録（郭南燕）」には，1860 年から 2020 年大までの外国人宣教師 442 名が日本語で著述した書籍，約 2700 点が著者名順に列挙されてい

る。目録には，題名，著述形態，出版者，出版年，ページ数などの情報とともに，著者の生没年や所属宣教会，主な活動などの情報も記載され，有益である。（遠藤佳那子）

（2023 年 2 月 15 日発行　勉誠社刊　A5 判縦組み　488 頁　定価 12,100 円　ISBN 978-4-585-39026-8）

**山中司・神原一帆著『プラグマティズム言語学序説――意味の構築とその発生――』**

本書は，本来哲学の分野で論じられてきたプラグマティズムを言語研究に取り入れることの意味と，その可能性を論じる書である。この書を通じて，プラグマティズムを言語研究に取り入れることは，理論言語学的研究だけではなく，応用言語学的研究の基盤構築に寄与するものも大きく

本書の構成は以下のとおりである。「まえがき」につづき，「第 1 章　序論」，「第 2 章　合理主義的な言語モデルのその先へ」，「第 3 章　コミュニケーションの基本原理としてのプラグマティズム」，「第 4 章　構成される意味」，「第 5 章　プラグマティックな言語論の拡張可能性」，「第 6 章　結論」。末尾に，「参考文献」，「あとがき」，「索引」を付す。（椎名渉子）

（2023 年 2 月 22 日発行　ひつじ書房刊　A5 判横組み　260 頁　定価 4,400 円　ISBN 978-4-8234-1184-7）

**釘貫亨著『日本語の発音はどう変わってきたか――「てふてふ」から「ちょうちょう」へ、音声史の旅――』**

日本語の音声の変遷と，またそれに関わる表記のあり方について時代別に説く書である。「序章　万葉仮名が映す古代日本語音声――唐代音からの推定――」は，「第 1 節　万葉仮名が日本語の形を保存する」「第 2 節　隋唐音声と万葉仮名の読み」「第 3 節　漢字と古代日本語資料」の 3 節からなり，古代日本語の音声の資料と推定方法などを紹介する。「第 1 章　奈良時代の音声を再建する――万葉びとの声を聞く――」は「第 1 節　奈良時代のハ行音とサ行音」「第 2 節　奈良時代に母音は八つあった」「第 3 節　音節結合の法則（有坂法則）の発見」「第 4 節　奈良時代語［o／ö］対立の解消過程」「第 5 節　平安時代の「コ」甲乙の例」以上 4 節から，古代の音声について述べる。「第 2 章　平安時代語の特色――聞いた通りに書いた時代――」では，「第 1 節　平仮名、片仮名と表音文字」「第 2 節　表音文字の完成形としての平仮名」「第 3 節　ハ行転呼音と仮名遣いへの道」以上 3 節を配し，平安時代の表記と音韻との関係について語る。「第 3 章　鎌倉時代ルネサンスと仮名遣い――藤原定家と古典文学――」は，表記，すなわち仮名遣いの問題について論じる章である。「第 1 節　藤原定家の仮名遣い」「第 2 節　定家の表記改革――漢字仮名交じり文の創始――」「第 3 節　定家と鎌倉時代ルネサンス」からなる。「第 4 章　宣教師が記録した室町時代語――「じ」「ぢ」、「ず」「づ」の合流と開合の別――」は「第 1 節　四つ仮名混同の問題」「第 2 節　オ段長音の開合の問題」からなり，四つ仮名と開合の問題について言及する。

「第 5 章　漢字の音読みと音の歴史――複数の読みと日本の漢字文化――」は，ここまで時代

順に論述してきた流れから少し離れ，日本語における漢字のあり方について述べる。「第1節　日本の漢字文化」「第2節　日本漢字音の音声の特徴」からなる。最後に「第6章　近世の仮名遣いと古代音声再建――和歌の「字余り」から見えた古代音声――」は，「第1節　近世古典学の実証的蓄積」「第2節　本居宣長の仮名遣い論」で契沖・宣長の業績を抑え，「第3節　明治以降の仮名遣い」へと説き及ぶ。なお巻末に「注」と「索引」を付す。（遠藤佳那子）

（2023年2月25日発行　中央公論新社刊　新書判縦組み　242頁　定価924円　ISBN 978-4-12-102740-5）

**岡雅彦編『江戸時代前期出版年表〔万治元年～貞享五年〕』上・下**

本書は『江戸時代初期出版年表〔天正十九年～明暦四年〕』（2011）の続編にあたり，万治元年から貞享五年まで30年間に出版された版本を，年月順に配列した年表である。上巻は万治元年（1658）から延宝四年（1676），下巻は延宝五年（1677）から貞享五年（1688）を収録する。

本書に採録される書目は，編者が調査・実見して刊記を確認したもの，刊記が無いものについては序跋等から刊年を推定できるもの，そして先行研究において刊年に関する情報が紹介されているもの，という選定を経ている。年表に収録された各文献の記載項目は，主に，書名，巻数，著者，刊記，所蔵である。巻末に「書名索引」「版元名索引」を付す。（遠藤佳那子）

（2023年2月25日発行　勉誠社刊　B5判縦組み　1120頁　定価35,200円　ISBN 978-4-585-32029-6）

**福島直恭著『後期江戸語の行為要求表現――言語の歴史的研究の意義と評価――』**

本書はおもに後期江戸語の行為要求表現にかかわる言語事象，たとえば「～なさい」や「～ねえ」，そして「～なされ」が「～なさい」に変化したのと同じ原理による変化と見られる「～ございます」を具体例として取り上げ，言語の歴史的研究について考究するものである。中央の視座から記述されてきた日本語の歴史だけではなく，「中央以外の視座」からの歴史記述にも等しく価値が認められるものであることを示し，その視座の転換の必要性と有効性の実証を試みている。

本書の構成は以下のとおりである。「序章　本書の目指すところ」「第1章　後期江戸語における行為要求表現の諸相」「第2章　行為要求表現「～なさい」の成立」「第3章　後期江戸語における「ござります」と「ございます」」「第4章　後期江戸語の非標準的命令表現「ねえ」について」「第5章　言語の歴史的研究の意義と評価」「終章　これからの日本語史研究」，以上7章からなる。（遠藤佳那子）

（2023年2月28日発行　花鳥社刊　A5判横組み　179頁　定価3,850円　ISBN 978-4-909832-74-0）

**松木正恵著『複合辞研究――その成り立ちと広がり――』**

本書では，複合辞の研究史，文法化の観点から捉える引用表現・思考・視覚動詞との関連，複文構文との関連，コーパス資料をもとにした網羅的・体系的な研究を通した今後の可能性を示す。複合辞を総合的に論じた書である。ひつじ研究叢書言語編第 114 巻として刊行された。

本書の構成は以下のとおりである。「まえがき」につづき，「第 I 部　複合辞研究史　主に 20 世紀中について」には，「第 1 章　「複合辞」の提唱――永野賢の複合辞研究――」，「第 2 章　初期の複合辞研究――水谷修・佐伯哲夫の複合辞研究――」，「第 3 章　分析的傾向と複合辞――田中章夫の通時的研究――」，「第 4 章　「後置詞」というとらえ方――松下大三郎から高橋太郎まで――」，「第 5 章　「形式副詞」との関連性――山田孝雄から奥津敬一郎まで――」，「第 6 章　「複合助詞」の特質」，「第 7 章　「複合辞」の体系化をめざして――認定基準の設定と複合辞一覧――」，「第 8 章　「複合辞性」の再検討と複合辞の位置づけ」，「第 9 章　辞的表現研究の広がりと深化」，「第 10 章　複合辞認定に対する問題提起と研究の方向性」。「第 II 部　複合辞と文法化　引用表現・思考動詞・視覚動詞との関係を中心に」には，「第 11 章　引用の形式をとる複合辞について――引用から複合辞へ――」，「第 12 章　複合辞研究と文法化――動詞が欠落した口語的複合辞を例として――」，「第 13 章　引用構造を用いた会話表現――「というのだ」「みたいな」を例に――」，「第 14 章　「と思うと」の連続性」，「第 15 章　「思う」を中心とする接続形式について」，「第 16 章　「見る」の文法化――視覚動詞を中心とした接続表現「てみると」「てみれば」「てみたら」を例として――」，「第 17 章　「見ること」と引用表現――視覚動詞を中心とした接続表現　2――」，「第 18 章　「見えること」と引用表現――視覚動詞を中心とした接続表現　3――」，「第 19 章　「とみえる」の表現性――「らしい」との比較を通して――」，「第 20 章　「とみえ（て）」の使用推移――「とみえる」類・「らしい」類の明治期以降の出現度数対照表をもとに――」。「第 III 部　複合辞と複文構文　連体修飾節構文を中心に」には，「第 21 章　連体修飾節――構造的把握と意味的把握――」，「第 22 章　評価的な名詞の連体修飾構造について」，「第 23 章　「代物」の評価性について」，「第 24 章　連体修飾節における底名詞の性質と名詞性接続成分――連体複文構文と連用複文構文の接点を求めて――」，「第 25 章　連体修飾節の位置づけ再考――連続性に着目して――」，「第 26 章　連体修飾節の構造と意味――両者のずれから見た節のタイプの連続性――」。「第 IV 部　複合辞研究の方向性」には，「第 27 章　複合辞の共時的研究 I ――田中寛の研究について――」，「第 28 章　複合辞の共時的研究 II ――藤田保幸の研究について――」，「第 29 章　コーパスを用いた複合辞研究」，「第 30 章　複合辞研究のこれから」。末尾に，「あとがき」，「初出一覧」，「参考文献」，「用例出典」，「索引」を付す。（椎名渉子）

（2023 年 3 月 1 日発行　ひつじ書房刊　A5 判横組み　672 頁　定価 10,120 円　ISBN 978-4-89476-661-7）

**米倉綽・長野明子・島田雅晴著『英語と日本語における等位複合語』**

等位複合語には，大きくは dvandva 等位複合語と dvandva ではないものがあるが，本書では日本語をはじめアジア諸語に見られる dvandva の形式と，初期中英語における dvandva 形式をめぐる等位複合語のを取り上げ，通言語的・通時的論考を展開する。古英語，中英語，初期近代英語における等位複合語の生起の特徴をみたうえで，言語接触の観点から日本語における等位複合語を捉える。

本書の構成は以下のとおりである。「まえがき」につづき，「第 1 章　歴史的観点からみた英語の等位複合語」（米倉　綽），「第 2 章　等位複合語の定義と類型と形態」（長野明子），「第 3 章　ト型等位複合語（additive dvandva）の諸問題」（長野明子），「第 4 章　Dvandva 複合語の構造を考える」（島田雅晴）。また，各章にはコラムが付され，メニュー名，レシピ名，英語前置詞を使った料理タイトルについて対象物の写真と共に dvandva 等位複合語の考察を行っている内容も興味深い。末尾に「参考文献」と「索引」を付す。本書は開拓社叢書 38 巻として刊行された。（椎名渉子）

（2023 年 3 月 13 日発行　開拓社刊　A5 判横組み　288 頁　定価 3,850 円　ISBN 978-4-7589-1833-6）

**長田俊樹著『上田万年再考――日本言語学史の黎明――』**

本書は上田万年の講義ノートや講演から，上田の言語学的業績や，これまで影響関係があるとされてきたガーベレンツの学説との関係について再検討をする。また，同時代から現代にかけて上田万年がどのような評価を受けてきたのか，彼の学説史上の評価についても整理し，従来の上田万年像を改めようと試みるものである。

本書の構成は以下のとおりである。「序章　上田万年の学問的評価」「第 1 章　上田万年の生い立ち」「第 2 章　上田の留学前の講演や文章を検証する」「第 3 章　上田万年講義ノートを検証する　その 1――序文――」「第 4 章　上田万年講義ノートを検証する　その 2――ガーベレンツからの影響――」「第 5 章　上田万年講義ノートを検証する　その 3――上田は何に依拠したのか――」「第 6 章　ガーベレンツをめぐって」「第 7 章　「P 音考」考」「第 8 章　上田万年の評判――学問環境の整備・政治的手腕・人間性――」「終章　上田万年像を検証する」以上 10 章からなる。加えて「補論　「国語という思想」という「おはなし」――イ・ヨンスク著『「国語」という思想』をよんで――」を収録する。（遠藤佳那子）

（2023 年 3 月 20 日発行　ひつじ書房刊　A5 判横組み　305 頁　定価 5,720 円　ISBN 978-4-8234-1170-0）

**仁科恭徳『パラレルコーパス言語学の諸相』**

パラレルコーパスとは，ある言語で書かれたテクストと翻訳されたテクストを，文単位あるいは段落単位などのまとまった言語単位で対応させた翻訳コーパスをさす。本書は，日本において近年注目され始めたパラレルコーパス研究に焦点を当て，「パラレルコーパス言語学（parallel corpus linguistics）」と著者が命名した造語を用い，その歴史と

可能性について論じる。

本書の構成は以下のとおりである。「はしがき」と「謝辞」につづき，「第 1 章　序論編：コーパス言語学とは何か」，「第 2 章　概論編：パラレルコーパス概観」，「第 3 章　活用編：パラレルコーパスを用いた分析例」，「第 4 章　開発編：日英・英日パラレルコーパスオンライン検索ツールの開発について」「第 5 章　実証編：パラレルコーパス検索の威力」。末尾には「参考文献」，「本書で取り上げた主な日英・英日パラレルコーパス」（リスト），「あとがき」，「索引」を付す。（椎名渉子）

（2023 年 3 月 23 日発行　開拓社刊　A5 判横組み　216 頁　定価 3,190 円　ISBN 978-4-7589-2380-4）

**多和わ子著『日本語学習者のための文法再考察』**

本書は，米国の大学生が外国語である日本語を一教科として教室で学ぶ場合の日本語指導と日本語学習の現状と課題を踏まえ，外国語として日本語を学ぶ学習者のための日本語文法を再考する書である。コミュニケーションの指導に重きが置かれる昨今の日本語指導の傾向を批判的に捉え，文法が日本語学習の基盤であることを論じる。

本書の構成は以下のとおりである。「はじめに」につづき，「第 1 章　米国における日本語教育の現状と課題」，「第 2 章　文法という言葉の多義性，「第 3 章　学習科学の研究から日本語文法記述への応用の考察」，「第 4 章　日本語文法記述の例」，「第 5 章　文法を基盤とした四技能指導実践の一例」。末尾に「おわりに」，「参考文献」，「索引」を付す。（椎名渉子）

（2023 年 3 月 31 日発行　開拓社刊　A5 判横組み　216 頁　定価 3,300 円　ISBN 978-4-7589-2381-1）

**遊佐典昭・小泉政利・野村忠央・増冨和浩編『言語理論・言語獲得理論から見たキータームと名著解題』**

本書は，分野の専門化，分散化が進み，多様化した言語学界の状況を踏まえ，言語理論，言語獲得理論から厳選したキーターム解説と，名著解題を編んだ書である。本書で取り上げられるキータームや書籍，論文は，言語理論・言語獲得理論を理解するうえで必須のものが掲げられており，学会動向や海外新潮を踏まえるうえでも役立つといえる。

本書の構成は以下のとおりである。「はしがき」につづき，「第 I 部　キーターム」には，「［1］アラインメント（言語類型論）」（柳田優子），「［2］アラインメント（歴史言語学）」（柳田優子）のほか，「［6］「が・の」交替」（西岡宣明），「［23］最大エントロピー法」（川原繁人・桃生朋子），「［35］直接受動文と間接受動文」（本間伸輔），「［43］複合動詞の獲得」（木戸康人），「［54］様態・結果の相補性仮説」（都築雅子）など，55 のキーターム解説が並ぶ。また，「第 II 部　名著解題」には，「［1］Abney, Steven P. (1987) The English Noun Phrase in Its Sentential Aspect, Doctoral dissertation, MIT」（増冨和浩）から「［61］Yo-

shimura, Noriko (2017) “Scrambling,” Handbook of Japanese Syntax, Mouton De Gruyter」（吉村紀子・中山峰治）まで 61 の名著解題が編まれる。どの項目も 2〜3 ページで簡潔にまとめられる。末尾に，「あとがき」，「参考文献」，「索引」，「執筆者紹介」を付す。（椎名渉子）

（2023 年 3 月 31 日発行　開拓社刊　A5 判横組み　400 頁　定価 5,060 円　ISBN 978-4-7589-2382-8）

**泉子・K・メイナード著『ミステリードラマの日本語――発話と記号の演出を探る――』**

本書は，2010 年以降に放映されたミステリードラマ 25 作品 253 話分の会話を対象に，言語学，会話・談話分析，記号論の視点から明らかにするものである。ミステリードラマというメディアを通して消費される日本語をみることで，表現者がどのような効果を狙って日本語に工夫を凝らすのかという演出の実態を捉える。日本語教育・日本文化教育にも大きく貢献する一書といえる。

本書の構成は以下のとおりである。「まえがき」につづき「第 1 部　背景とアプローチ」には，「第 1 章　ミステリードラマとメディア現象」，「第 2 章　アプローチ：発話と記号の考察」。「第 2 部　発話：逸脱性と創造性の演出」には「第 3 章　会話：ルールに違反する」，「第 4 章　引用：言う行為に注目する」，「第 5 章　キャラクター・スピーク：バリエーションで遊ぶ」，「第 6 章　キャラクター・スピーク：スタイルで揺れ動く態度を示す」，「第 7 章　キャラクター・スピーク：アイデンティティを操作する」。「第 3 部　記号：多様性と娯楽性の演出」には，「第 8 章　人称と呼称：自分と相手の関係を操作する」，「第 9 章　レトリック：笑いを誘う」，「第 10 章　文字テロップ：情報と情意を付け加える」，「第 4 部　ミステリードラマの日本語」には「第 11 章　まとめと展望」。末尾に「参照文献・サイト」，「使用作品リスト」，「作品別主要登場人物リスト」，「著者索引」，「事項索引」を付す。（椎名渉子）

（2023 年 4 月 1 日発行　くろしお出版刊　A5 判横組み　448 頁　定価 5,940 円　ISBN 978-4-87424-925-3）

**滝浦真人・椎名美智編『イン／ポライトネス――からまる善意と悪意――』**

本書は，「インポライトネス」（impoliteness）を主題とした論文集である。日本語におけるポライトネスが「ふるまい」の次元で捉えられるものであるのに対し，インポライトネスは「気持ち」の次元に表れやすいとあるように，ポライトネスとインポライトネスは反対の関係とは言えない。建前と本音を分ける日本において，前半では悪態や毒舌，ディスリといった言葉の暴力の仕組みを考察する論考が，後半では文学のモチーフとしても重要だという視点から文学作品を対象とした論考が並ぶ。

本書の構成は，まず「序論　日本（語）でイン／ポライトネス研究が必要な理由」（滝浦真人）につづき，「Part1　善意なのか悪意なのか」には，「ママ友の対立場面におけるイン／ポライトネス分析――感情と品行のフェイスワーク――」（大塚生子），「バラエティ番組に

おける毒舌トーク――擬似インポライトネスの観点から――」（佐藤亜美），「身体の政治・ジェンダー・イン／ポライトネス」（柳田亮吾）の三本の論考が並ぶ。また，「Part 2　イン／ポライトネスの宝庫・文学」には，「意地を張りあう人びと――『明暗』におけるイン／ポライトネス――」（阿部公彦・椎名美智・滝浦真人），「悪態をつく人びと――シェイクスピア時代のコメディを分析する――」（椎名美智），「ポライトネス理論と文学研究をつなぐ――志賀直哉「灰色の月」の「無愛想」の戦略――」（阿部公彦）の三本の論考により，文学のモチーフ・研究の視点として。末尾に，「編者あとがき」，「索引」，「執筆者紹介」を付す。（椎名渉子）

（2023 年 4 月 25 日発行　ひつじ書房刊　A5 判横組み　272 頁　定価 3,740 円　ISBN 978-4-8234-1159-5）

**牧秀樹『象の鼻から言語学　主語・目的語カメレオン説』**

本書では，三上章が 1960 年に出版した『象は鼻が長い――日本語文法入門――』を出発点として「主語」「目的語」とは何かに迫る。本書は，著者がこれまでに出版してきた『誰でも言語学』・『これでも言語学』・『それでも言語学』の姉妹作として，日本語学・言語学の研究者・初学者に限らず，幅広い一般の読者も対象とした言語学の概説書といえる。

本書の構成は以下のとおりである。「まえがき」につづき，「1 章　日本語の「象は鼻が長い」――三上章氏の主張の最短要約――」，「2 章　世界の言語の「象は鼻が長い」――そんなにあるの？――」，「3 章　日本語の主語の問題――主語はカメレオン――」，「4 章　日本の教科書の中の「目的語」――日本語には、目的語があるの？――」，「5 章　日本語の目的語の問題――おぬしもカメレオン！――」，「6 章　日本語の形容詞の問題――活用か環境か――」，「7 章　カメレオン発見テスト――んだってテスト・のはテスト・にへテスト・数字テスト――」，「8 章　おわりに――混乱を減らすために――」。末尾に「参考文献」と「索引」を付す。（椎名渉子）

（2023 年 4 月 28 日発行　開拓社刊　A5 判横組み　164 頁　定価 2,200 円　ISBN 978-4-7589-2384-2）

**閻琳・堤良一『レポート・卒論に役立つ　日本語研究のための統計学入門』**

本書は大学の学部生を主な読者対象とし，日本語学で統計学を使用したレポート・論文を作成するための概説書である。分かりやすい文と図によって構成され，各章には練習問題や課題が掲げられる。統計学を使用したい日本語学ゼミの学部生には必携の書といえる。

本書の構成は次のとおりである。「ある日の日本語学ゼミにて　はじめに～本書をお読みいただく前に～」，「序章　基本的な用語・知識とソフトの使い方」には「用語・知識」，「ソフトの使い方」。「第 1 章　$\chi^2$ 検定：質的データの違いを検定しよう」，「第 2 章　t 検定：2 つの母集団の平均の違いを検定しよう」，「第 3 章　1 要因の分散分析：3 つ以上の母集団の平均の違いを検定しよう」，「第 4 章　2 要因の分散分析（参加者間）：参加者間で 2 要因の平均の違いを検定しよう」，「第 5 章　2 要因の分散分析（参加者内）：参加者内で 2 要因の平均の違いを検定しよう」，「第 6 章　2 要因の分散分析（混合計画）：

参加者間と参加者内の組み合わせで2要因の平均の違いを検定しよう」,「第7章　相関：変数間の相関を検定しよう」。ここまでの各章には「事前講義」,「練習問題」が付されている。また，Excelデータファイルの DL 先も付され，データを実際にさわりながら本書を読み進めることができる。末尾には「おわりに」,「参考文献」が付く。（椎名渉子）

（2023年5月1日発行　くろしお出版刊　A5判横組み　246頁　定価2,640円　ISBN 978-4-87424-931-4）

**松丸真大・白岩広行・原田走一郎・平塚雄亮編『ワークブック　方言で考える日本語学』**

本書は，方言研究の知見をもとに日本語学の基礎的知識を学習していくためのワークブックである。主な読者として想定された大学生が，ワークブックの演習課題をとおして主体的に言語研究とは何かに迫ることができる書である。音声データや各章にある基本問題，発展問題の解答例にも QR コードからアクセスしながら，日本語のしくみを理解できるようになっている。

本書の構成は以下のとおりである。「はじめに」と「本書について」につづき，「第1課　私たちは日本語を知らない」,「第2課　母音と子音」,「第3課　五十音図と特殊拍」,「第4課　アクセント」,「第5課　形態素」,「第6課　語と句」,「第7課　格ととりたて」,「第8課　複文」,「第9課　活用」,「第10課　ヴォイス」,「第11課　アスペクト・テンス」,「第12課　モダリティ」,「第13課　待遇表現」,「第14課　語彙」,「第15課　言語変化」,「第16課　方言研究の方法」。末尾に,「参考文献一覧」,「おわりに」,「索引」を付す。（椎名渉子）

（2023年5月10日発行　くろしお出版刊　B5判横組み　146頁　定価1,650円　ISBN 978-4-87424-934-5）

**安田尚道著『上代日本語研究史の再検討』**

本書は1971年から2020年にわたって発表された著者の上代日本語研究史に関わる論考を，発表年順に収録した論文集である。書き下ろしとなる「第1章　序説」から以下20章にわたり，石塚龍麿，橋本進吉，有坂秀世らの学説を考究する。構成は以下のとおりである。「第2章　朝鮮語と日本語の母音調和と両国語の母音の対応について」「第3章　「け長し」「長きけ」「朝にけに」「旅のけ」等のケについて」「第4章　上代語の母音はいくつあったか」「第5章　石塚龍麿と橋本進吉――上代特殊仮名遣の研究史を再検討する――」「第6章　石塚龍麿の連濁論――『古言清濁考』を読む――」「第7章　橋本進吉は何を発見しどう呼んだのか――上代特殊仮名遣の研究史を再検討する――」「第8章　上代特殊仮名遣の〝ノの二類〟の研究史」「第9章　「神」と「上（かみ）」は同源だとする説をめぐって」「第10章　有坂秀世「上代に於ける特殊な假名づかひ」と橋守部『稜威道別』」「第11章　（分野別名著案内）橋本進吉（述）『古代國語の音韻に就いて』（神祇院、一九四一）」「第12章　『古事記伝』の「仮字の事」をどう読むか――上代特殊仮名遣の研究史を再検討する――」「第

13 章　『古事記伝』の「仮字の事」に引かれた『古事記』の用例」「第 14 章　〝ク語法 aku 説〟とその提唱者たち」「第 15 章　橋本進吉の未定稿「上世の假名遣に關する研究序論」について」「第 16 章　万葉仮名の二類の区別はどう理解されたのか――〝音の区別に基づく〟という考えの提起と撤回――」「第 17 章　上代特殊仮名遣研究における未解決の問題」「第 18 章　（特集　人物でたどる日本語学史）石塚龍麿」「第 19 章　上田万年「P 音考」前後」「第 20 章　森重敏の万葉仮名論は果たして五母音説なのか？」，以上である。（遠藤佳那子）

（2023 年 5 月 19 日発行　武蔵野書院刊　A5 判横組み　344 頁　定価 12,650 円　ISBN 978-4-8386-0779-2）

**今井むつみ・秋田喜美著『言語の本質――ことばはどう生まれ、進化したか――』**

本書は，これまで言語学の周辺的な立場に置かれていた「オノマトペ」こそ，言語の本質を解き明かす鍵であるという観点から，オノマトペとアブダクション推論を主軸として言語の誕生と進化の根源を考究する。本書の構成は以下のとおりである。「第 1 章　オノマトペとは何か」「第 2 章　アイコン性――形式と意味の類似性――」「第 3 章　オノマトペは言語か」「第 4 章　子どもの言語習得 1 ――オノマトペ篇――」「第 5 章　言語の進化」「第 6 章　子どもの言語習得 2 ――アブダクション推論篇――」「第 7 章　ヒトと動物を分かつもの――推論と思考バイアス――」「終章　言語の本質」以上 8 章からなる。（遠藤佳那子）

（2023 年 5 月 25 日発行　中央公論新社刊　新書判縦組み　277 頁　定価 1,056 円　ISBN 978-4-12-102756-6）

**小林隆・大西拓一郎・篠崎晃一編『方言地理学の視界』**

国立国語研究所の『日本言語地図』『方言文法全国地図』を主導し，方言地理学をリードして来た佐藤亮一氏（国立国語研究所名誉所員，フェリス女学院大学名誉教授）が 2020 年 11 月に逝去された。本書は，佐藤氏の学界への功績をたたえ企画された論文集である。方言地理学の研究課題を体系的に整理し，最新の研究状況を把握できるように編まれている。

本書の構成は以下のとおりである。「まえがき」につづき，「第Ⅰ部　方言地理学の理論」には「第 1 章　共通語化と方言地理学」（小林隆・熊谷康雄），「第 2 章　方言安定期と方言地理学」（大西拓一郎），「第 3 章　分布類型、形成類型と地理方言学」（安部清哉）。「第Ⅱ部　方言地理学の資料」には「第 4 章　『日本言語地図』と方言地理学」（岸江信介・峪口有香子），「第 5 章　『方言文法全国地図』と方言地理学」（日高水穂），「第 6 章　『日本方言大辞典』と方言地理学」（作田将三郎）。「第Ⅲ部　記述方言学と方言地理学」には「第 7 章　形態論と方言地理学――首都圏における対格の変異を例として――」（小西いずみ），「第 8 章　テンス・アスペクトと方言地理学」（津田智史），「第 9 章　可能・自発と方言地理学」（竹田晃子），「第 10 章　モダリティと方言地理学――ゴト類の用法の多様性と山口東部方言の禁止の「コト」――」（舩木礼子），「第 11 章　敬語の言語地理学――日本語敬語形成論の構築にむけて――」

（中井精一）。「第Ⅳ部　文化・社会と方言地理学」には「第 12 章　民俗語彙と方言地理学――〈井戸〉を表す語彙――」（新井小枝子），「第 13 章　口承文芸と方言地理学――あやしことばの地域差――」（椎名渉子），「第 14 章　キリシタン文化と方言地理学」（小川俊輔），「第 15 章　言葉遊びと方言地理学――岐阜県・愛知県のチーム分けジャンケンの掛け声を例に――」（山田敏弘），「第 16 章　あいさつと方言地理学――他家訪問場面の新旧調査の比較を通して――」（中西太郎），「第 17 章　交通と方言地理学」（都染直也）。「第Ⅴ部　方言地理学の新分野」には「第 18 章　オノマトペと方言地理学」（川﨑めぐみ），「第 19 章　感動詞と方言地理学――品物を手渡す場面における感動詞の地理的分布――」（田附敏尚），「第 20 章　言語行動の地域差 - 山形県東田川郡三川町の事例」（篠崎晃一），「第 21 章　コンピュータと方言地理学」（鑓水兼貴）。また，末尾には「佐藤亮一氏の時代と学問」（沢木幹栄），「佐藤亮一氏略歴」，「佐藤亮一氏主要著作一覧」と，本書の執筆者一覧を付す。（椎名渉子）

（2023 年 5 月 25 日発行　勉誠出版刊　A5 判横組み　416 頁　定価 8,800 円　ISBN 978-4-585-38003-0）

**村上謙著『近世後期上方語の研究――関西弁の歴史――』**

上方語の研究には近世前期の基礎研究として湯沢幸吉郎（1936）『徳川時代言語の研究』がある一方で，近世後期に対する基礎研究には不足があることを踏まえ，本書は近世後期上方語の全体像を明らかにすべく，文法，音韻，資料，表記ほか，多岐にわたる議論と記述を試みる。本書 5 部 18 章から構成される。「第 1 部　概観」は「第 1 章　近世上方語とは」「第 2 章　遊里語の世界」の 2 章からなり，時代区分と上方遊里語の影響力や運用状況などについて述べる。「第 2 部　研究手法と資料」には，「第 3 章　研究手法――用例収集と分析・解釈――」「第 4 章　歌舞伎、浄瑠璃」「第 5 章　対照表形式の近世後期上方語彙資料」を配し，研究方法と洒落本や噺本以外の研究資料について述べる。「第 3 部　音変化および表記」は，「第 6 章　音変化の諸相」「第 7 章　形容詞ウ音便の変化形」「第 8 章　形容詞ウ音便の短呼形」「第 9 章　口語体表記――活用語尾と音便形の表記を中心に――」の 4 章からなり，音韻と表記の問題を論じる。「第 4 部　連用形命令法をめぐる問題」では，「第 10 章　「動詞連用形＋や」――連用形命令法と助動詞ヤルとの関連――」「第 11 章　連用形命令法の出現」「第 12 章　連用形禁止法の出現」「第 13 章　ンの用法」「第 14 章　一段化動詞」「第 15 章　二段活用の一段化とその後の展開例としての「一段化動詞」」以上 5 章の，おもに連用形命令法に関わる論考からなる。そして「第 5 部　ナサルと「テ＋指定辞」をめぐる諸問題」には，「第 16 章　補助動詞ナサルの変遷」「第 17 章　「テ＋指定辞」の成立」「第 18 章　「テ＋指定辞」の変遷」の 3 章を収録する。（遠藤佳那子）

（2023 年 7 月 20 日発行　花鳥社刊　A5 判横組み　317 頁　定価 4,950 円　ISBN 978-4-909832-75-7）